

理論的美徳、IBE、真理寄与性

--形而上学の方法論的妥当性をめぐる論争--

Theoretical Virtues, IBE and Truth-Conduciveness: Disputes over the
Methodological Validity of Metaphysical Inquiry

近藤雅熙

Abstract

In many metaphysical inquiries, philosophers often appeal to theoretical virtues such as simplicity and explanatory strength, and employ inference to the best explanation (IBE) to select theories that seem truth-conducive. This note examines two major criticisms of this procedure, those advanced by Bueno and Shalkowski (2020) and Ritchie (2022), and reassesses its methodological validity. In particular, we argue that Ritchie's challenge raises broader issues that cannot be settled without a prior account of truth itself. Accordingly, we suggest that a theory of truth should precede evaluations of the truth-conduciveness of IBE within metaphysical inquiry.

1. 研究テーマ

本論文は、形而上学の方法論的妥当性をめぐる問題を扱う。具体的には、形而上学内部の諸理論は理論的美徳と IBE の観点から比較することができ、そのなかで最も優位性を持つ理論に真理寄与性を認める、という主張が妥当性を持つか否かを検討する。

2. 研究の背景・先行研究

2.1. 理論的美徳と IBE

形而上学--あるいは広く哲学一般--の方法論的枠組みを考察する研究であるメタ哲学 (metaphilosophy) は、近年の哲学全体における主要分野の一部を構成している。そのなかで争点の一つとなっているのが、形而上学における理論的美徳 (theoretical virtues) および、理論的美徳にもとづく最良の説明への推論 (Inference to the Best Explanation, 以下 IBE) の使用の是非である。この問題は、実際には形而上学と自然科学の (方法論的) 連続性と

いうクワイン以来のホーリズムと強く関係している (see also Ritchie (2022), p. 203)。つまり、自然科学と形而上学がともに IBE を用いて理論選択しているとすれば、これらは方法論的観点から連続的であり、したがって自然科学が IBE を用いた理論選択で実際に成功しているならば、形而上学も同様に IBE を用いた理論選択で成功するだろう、という推論の是非が問題になっているのである。

以降の議論に進む前に、ここで理論的美徳にもとづく IBE という理論選択的手続きを簡潔に見ておきたい。第一に、理論的美徳とは、十分に優れた理論が備えているべき一定の理論的特徴のことを意味する。十分に優れた理論であるとは、その理論が真理に近い、つまり真理寄与性 (truth-conduciveness) を持つということに等しい。すなわち「理論的美徳とはある理論が真であるか、または受け入れるに値することが確からしいことを示すような、ある理論が持つ特徴である」(Keas (2018), 2761)。

次に IBE とは、ある事実あるいは証拠を説明する二つ以上の競合する理論が与えられた際、与えられた証拠をよりよく説明できる理論を選択する--その理論により強い真理寄与性を認める--推論形式のことを指す。ゆえに、理論的美徳と IBE は、IBE を行う際にはしばしば理論的美徳という指標が用いられる、という形で関係する。

例えば、リンゴが木から落ちたとしよう (これを所与の事実とする)。我々はこの事実を説明する際、競合する二つの理論を考えることができる。一つは、リンゴは枝を離れ重力によって落下したとする理論 T であり、もう一つは、透明人間がリンゴを枝から外して地面に落としたとする理論 U である。我々は理論 U を主張する人に対して、あなたの理論は事実を説明する際に余計な仮定を持ち込んでいるが、実際の現象は単純な理論 T で十分に説明可能だと反論するだろう。このとき、我々は単純性 (simplicity) という理論的美徳にもとづいて理論 T の真理寄与性を推論している。このように IBE は日常的な推論において非常に一般的に用いられているといえよう。

2.2. 哲学における理論的美徳と IBE

Timothy Williamson は、哲学的営為と IBE を強力に結びつける研究者の代表的な一人である。Williamson (2016)において、Williamson は IBE をアブダクティブな方法 (abductive method) と言い換えた上で、自然科学で IBE が用いられるのと同様、哲学でも IBE が理論選択の局面で用いられるべきである (should) と主張する。ある証拠 E と理論 T が与えられたとしよう。こ

のとき、第一に T は E と整合していなければならない、という最小限の条件を我々は課すことが出来る。そして、ほかの諸条件が同じであるならば、T はより多くの美徳を持っていることで高く評価される。すなわち、

簡潔に言えば、それ [よい理論] は単純性と強度をかねそなえていなければならない。もし T が E の潜在的説明として十分に高いスコアを得ており、かつ競合相手よりも優れているならば、われわれは最良の説明への推論により E から T を推論するだろう (p. 266)。

Williamson によれば、こうしたアブダクティブな方法 (IBE) は自然科学だけでなく数学や哲学にも用いられることができる。もちろん、このように推論された T が誤りであることは常にあり得る。しかし、そのことは懐疑主義を正当化するわけではないと Williamson は指摘する。ここで可謬性 (fallibility) に注目してみよう。Williamson が述べるように、IBE は真なる説明もしくは理論を常に導くわけではない。むしろ、このようにして導かれる理論は、もし T が真であるならば、それは競合する T* が真であると仮定したときに E をよりよく説明できるだろう、という推定的な優位性を持つのである (*Ibid*)。

しかし、哲学における IBE の使用は Williamson によってのみ主張されているわけではない。元来、オッカムの剃刀に代表されるように、哲学は単純性などの理論的美徳を用いて理論間の評価を下してきた。現代の代表的な形而上学者である Theodore Sider も Williamson と同様、哲学 (彼の場合は特に形而上学) における IBE の使用が妥当だと考える研究者の一人である。

存在論的な信念を形成するにあたってのクワインの示唆はよく知られている。きみにとって最善の理論の存在論を信じよ、というものだ。理論は単純で、説明的強度を持ち、また他のよい理論と統合的である、といった場合にかぎりよいとされる (Sider (2011), p. 12; cf. Bueno & Shalkowski (2020), pp. 457-8)

Sider にとって、このような理論的美徳にすぐれた理論は単によいというだけではない。そうした理論は、世界の構造に沿っている -- Sider の表現では「関節に沿って曲がっている (carving at the joints)」 (*Ibid*) -- のである。あとで考察するが、Williamson や Sider らは理論的美徳に適った理論に真理寄与性、あるいは世界の構造の反映を見てとる。これは理論的美徳と IBE 使

用に関する彼らの重要な特徴である。

2.3. 哲学の美德・IBE 使用への批判

だが、このような理論的美徳に基づく IBE の使用は、哲学的探求の場面で真理寄与的な理論を導出することを可能にするだろうか。多くの形而上学者たちが IBE の使用を積極的にせよ消極的にせよ認容する一方で、数多くの批判も同時に展開されている。ここでは、近年の主要な批判として Otavio Bueno と Scott A. Shalkowski によるものと Jack Ritchie によるものを取り上げる。両者はこの問題に対し、それぞれ異なる視点から批判を展開しているという点で、問題の全体像をとらえるのに大きく役立つはずである。

それでは、第一に Bueno & Shalkowski (2020) の批判を追ってみよう。まず、彼らは理論的美徳にもとづく推論の典型様式を提示する。これは IBE の構造と基本的に同型である。すなわち、

1. もしある理論 T が関連する競合理論よりも美德の点で優れていれば、T は真である
 2. T は関連する競合理論よりも美德の点で優れている
- ∴ T は真である

という形式である (p. 460)。この推論がかりに妥当であるとするれば、理論的美徳にもとづく IBE という手続きから理論 T の真を結論できる。逆に、この推論が非妥当であることを示そうとするならば、二つの前提の内いずれかを否定すればよい。Bueno & Shalkowski はこれらの前提がいずれも誤りであるという主張を説得的に展開している。

第一の前提について見ると、ここでは実際の科学史における具体例の列挙による批判が行われている。例えば、一般にプトレマイオスの天文学は、コペルニクスの天文学に取って代わられたとされる。だが、理論的美徳の観点では多くの項目—統一性、単純性、説明力、等々—でプトレマイオスの方がコペルニクスのもものよりも優れていたという。つまり、第一の前提は実際の科学実践に照らして疑わしい。そして、第二の前提は、ある種の理論的美徳は実際にその理論が真であると仮定した上でなければ帰属できない、という論点を用いて批判される (注 1)。以上により、Bueno & Shalkowski は「科学と形而上学の双方において、理論的美徳にもとづく議論がある理論の真理を確立することに失敗してきた」(p. 467) と結論する。

今度は Ritchie (2022)による批判を追ってみよう。Ritchie は、形而上学と自然科学の連続性に関する主張を疑問視し、それらが非連続的であると考えている。ゆえに、理論的美徳にもとづく IBE の使用についても、かりに自然科学で用いられることが可能であるとして、それを自然に形而上学にも適用することは不可能だとする。Ritchie の批判は、次の二つの点に集約される。第一に、形而上学者たちが行う「自然科学は理論的美徳と IBE を用いているのだから、形而上学も可能である」という推論があるが、Ritchie は前件がすでに誤った前提であると指摘する。なぜなら、自然科学において美徳にもとづく IBE は補助的な役割しか持たず、一般に自然科学における理論選択は追加の経験的証拠にもとづいて行われるためである。

第二に、Ritchie は「自然科学においては、適切な条件下で理論的美徳が真理寄与的に働くことがあり得る」と想定した上で、同様の議論は形而上学において成立しないと主張する。例えば、自然科学においては単純性等の美徳が、いわば経験的証拠や確率論的な背景理論に依拠して真理寄与的に働く場合があり得る。だが、形而上学における理論は観察された事実との間に経験的、確率論的な差異をもたらすことが出来ない。ゆえに形而上学における理論的美徳と IBE の使用は--自然科学で成功する場合があり得たとしても--真理寄与的に働くことはないのである。

Ritchie はさらに形而上学と自然科学の連続性を複数の観点から批判することを通じて、最終的に形而上学が真理指向的な研究であることを否定する。すなわち、「科学と連続していると適切に主張できるような真理追求的な形而上学的プロジェクト (truth-seeking metaphysical project) は存在しない」(p. 215)。例えば、形而上学をモデル構築として理解するという議論は既によく知られている。しかしそれは Ritchie によれば科学と同様の種類のものではなく、いわば「ターゲットを欠いたモデル (targetless models)」である (p. 216)。つまり、形而上学をモデルとして理解した場合でも、それは世界のあり方を描写することを意図したものではないのである。最終的に Ritchie は、形而上学は「創造的な散文 (creative prose)」だと結論している (p. 218)。

3. 筆者の主張

3.1. これまでの論点を整理する

これまで見てきたように、形而上学における理論的美徳の使用に関しては多角的な批判が行われてきた。ここで Bueno & Shalkowski (2020)および

Ritchie (2022)の批判が具体的にどの部分に向いていたのかを直観的に把握するため、(理論的美徳にもとづく IBE を採用する) 形而上学者たちの典型的な推論を取り出そう。それは、(演繹的でない点でインフォーマルではあるが) 次の形式をとる。

- 1) 自然科学と形而上学は、ともに理論的美徳を用いて理論選択的推論を行う。
 - 2) 自然科学は理論的美徳を用いて真理寄与的な理論を導く。
- ∴ 形而上学は理論的美徳を用いて真理寄与的な理論を導く。

このように整理すると、Bueno & Shalkowski および Ritchie の批判の論点がきわめて明確になる。前者は前提 2) を否定することで結論を否定し、後者は前提 1) を部分的に否定することで結論を否定し、さらに前提部から結論の導出を否定することで全体を否定している。

こうした理論的美徳にもとづく IBE の使用への批判に対して、近年 Andrew Brenner による応答が行われた。Brenner (2023)は Bueno & Shalkowski (2020)を取り上げて、彼らの批判が不適當であると論じる。Brenner は美徳による IBE がそもそも真理寄与的でないという一般性の高い批判に対し、それらは実際に真理寄与的であり得るという主張を展開する。ゆえに、前提 2) への批判に対しては、一定の説得力のある防衛が行われたとみてよい。そのため、以降の議論では、まだ十分な応答が行われていない Ritchie の批判を取り上げる。

3.2. Ritchie への疑問--真理寄与性とは何か

既に見たように、Ritchie が方法論的連続性の観点にもとづいて形而上学の真理寄与性を批判した際、その論点は二つ挙げられていた。第一に、自然科学では理論的美徳が補助的役割に留まる点。第二に、自然科学で理論的美徳--例えば単純性 (または儉約性) --が真理寄与的に働くとしても、その事実が形而上学にも同様に当てはまる訳ではないという点である。ここでは、真理寄与性に焦点を当てるために後者の批判を取り上げたい。

Ritchie の議論を具体的な事例に沿って見ていこう (see Ritchie (2022), pp. 207-8)。例えば、オフィスで論文を書いていたら、突然ビル全体の電球が一斉に消えてしまったとする。このとき、我々は二つの説明を考えることが出来るだろう。一つ目は、ビル中の全部の電球がたまたま一斉に切れた、とい

うもので、二つ目は停電が起きた、というものである。我々は当然、後者--より単純な仮説--を正しい説明として支持するだろう。だが、ここで単純性という美德を満たす仮説が真理寄与的な説明として支持されるのは、それが単に単純だからというだけでなく、ここでは単純性が高い説明の方が、経験的事実に即して確率論的に確からしいからである。前者が起こる確率は、明らかに後者が起こる確率よりもずっと低いはずだ。

だが、同様の議論は形而上学では成り立たない。たとえば性質に関する普遍者実在論とトロープ説は、いずれも必然的真理を目指しているため確率論的な比較ができないのである。つまり、Ritchie は形而上学が理論的美徳を用いて真理寄与的な説明を導くことは不可能だと結論付ける。

しかし、Ritchie の説明が妥当であると仮定した場合、そこで批判されている形而上学の議論構造は数学や論理学等、他の非経験的とされる研究領域に対してもかなり一般的に当てはまるように思われる。ここでは、論理学に焦点を当ててみよう。論理学の領域では、近年、「どの論理が最も正しい論理なのか」という問題が盛んに議論されている。複数の論理が同時に正しいと主張する論理的多元主義 (logical pluralism) もあれば、一元主義的な立場 (one true logic と呼ばれる) を採用しつつ、Williamson のように古典論理が正しい論理だとする人々もいれば、Graham Priest のように非古典論理の正しさを主張する人々まで多くの研究者が論争に参画している。この論争でも重要になるのが、理論的美徳にもとづく IBE という理論選択的手法である (see Hjortland (2017), 632)。ところが、Ritchie の主張が論理学にも同様に当てはまるとするならば、こうした論争は真理寄与的な理論を導くものではなく、論理学もまた真理を目指す研究領域ではないことになり得る。だが、この帰結は論理学が自然科学の全領域に対して与える影響を踏まえるならば、かなり受け入れづらいものだろう。

ここで我々が指摘したいのは、こうした真理寄与性をめぐる議論において真理論的な観点ややや欠如しているように見える点である。例えば、近年の真理に関する多元主義 (pluralist theory of truth, もしくは alethic pluralism) を見てみよう。真理の多元主義は、これまでの一元主義的な真理論の議論に対し、各領域ごとに真理を成立させる性質が異なり得ると主張する (注 2)。ここでは、Pedersen (2012) に従って真理の多元主義の要点を明確化したい。まず、この世界には、多様な種類の命題が存在する。一例として、一般的な感覚的事実を記述する命題から、数学的命題、倫理的命題、法的命題、等々が挙げられる。

さて、従来の一元主義的な真理論によれば、これらの命題は共通する一つ

の（真理を成立させる）性質に基づいて真であるとされる。例えば、真理の対応説を選択した上で一元主義を採るならば、上述した全ての種類の命題の真理は、等しく現実との対応という性質に基づいて説明される。これに対し真理の多元主義に従うと、命題の真理について次の多元主義テーゼが採用される。

多元主義テーゼ：その性質に基づいて（in virtue of）各命題が真であるような、幾つかの性質 F_1, \dots, F_n ($n \geq 2$) が存在する。

そして、このような真理の多元主義が一定の説得性を持ち得るとするならば、形而上学—あるいは各研究領域一般—が理論的美徳を用いて真理寄与的な理論を選択しうるか否か、という問題は、第一に「そもそも**真理寄与性**とは何か」という真理論的観点を含む問いに後続する問題設定にならざるを得ない、ということが説得的に予期される。

一般に、形而上学や論理学、数学等の領域に属するとされる命題が真になる仕方、またはその命題が真であることに関与するような真理を成立させる性質は、（真理の多元主義を踏まえるならば）他の領域に属する命題の場合と異なる可能性がある。すると、単純性のような理論的美徳が、形而上学では自然科学の場合と同様に真理寄与的に働かない、という **Ritchie** の指摘に対し、真理の多元主義をもとに次のような応答を考えることが出来る。

すなわち、形而上学（や論理学、数学等の非経験的領域）に属する命題が真になる仕方は、経験的な自然科学の場合と異なり得るため、「形而上学では**自然科学の場合と同様に**理論的美徳が真理寄与的に働かない」という主張が、直ちに「形而上学における理論的美徳が真理寄与的に働かない」ことを含意するわけではない、という応答である。なぜなら、ここで真理寄与性を評価するための基準、つまり真理を成立させる性質（対応性、整合性など候補は複数ある）は領域依存的であり得るためである。

4. 今後の展望

理論的美徳、IBE、そして真理寄与性をめぐる諸問題は、特に形而上学、論理学、数学といった一般に非経験的とされる研究領域において特に重要である。特に、本論文で指摘した真理論的観点、特に真理の多元主義に注目した研究や、世界が本性上美的な性質を具えているか否か、といった問題設定も今後の展望として望まれる。

注

(1) ただし、類似の論点は Bueno & Shalkowski (2020)以前にも提起されている。代表的なものでは、例えば Bas van Fraassen によるバッド・ロット論法 (The Bad Lot Objection) が挙げられる。そこでは既に、IBE によって選択された仮説が真理寄与的であるためには、元の仮説集合のなかに真なる仮説が含まれていることが必要だが、IBE はその前提を保証しないという批判が行われている (cf. Ladyman et al. (1997))。

(2) ここでは、「真理を成立させる性質」を、ある命題が真であることに関与するような性質として解釈する。なお、ここで Pedersen が整理するように、例えば Michael P. Lynch の機能主義的な多元主義によれば、真理そのもの (truth-as-such) と、各領域に固有の、真理を成立させる性質 (domain-specific properties) は区別される (Pedersen 2012, 593-4)。

5. 参考文献

- Brenner, A. (2023), Theoretical virtues and the methodological analogy between science and metaphysics, *Synthese*, Vol. 201/54, 1-19
- Bueno, O. and S. A. Shalkowski (2020), Troubles with Theoretical Virtues: Resisting Theoretical Utility Arguments in Metaphysics, *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. 101, Issue 2, 456-469
- Hjortland, O. T. (2017), Anti-exceptionalism about logic, *Philosophical Studies*, Vol. 174, pp. 631-658
- Keas, M. N. (2018), Systematizing the theoretical virtues, *Synthese*, Vol. 195, pp. 2761-2793
- Ladyman, J. et al. (1997), A Defence of van Fraassen's Critique of Abductive Inference: Reply to Psillos, *The Philosophical Quarterly*, Vol. 47/188, pp. 305-321
- Pedersen, N. J. L. L. (2012), Recent Work on alethic pluralism, *Analysis*, Vol. 72/3, pp. 588-607
- Ritchie, J. (2022), On the continuity of metaphysics with science: Some scepticism and some suggestions, *Metaphilosophy*, Vol. 53, 202-220
- Sider, T. (2011), *Writing the Book of the World*, Oxford University Press
- Williamson, T. (2016), Abductive Philosophy, *The Philosophical Forum*, Vol. 47/3-4, pp. 263-280

(千葉大学)